I found the arrow, still unbroke;
And the song, from beginning to end,
I found again in the heart of a friend.

◎　高等學校の寮歌にもこの趣きがある。

自修室で勉强の間に一寸口吟んだ一曲が前の廊下を通る人の口に移り、その口に運ばれてずつと遠方でその同じ歌が高唱されてゐるのを聞く事がある。

寮歌の感應程鋭敏なものはない。一と所に小さく起つた歌の聲がだん〳〵廣く傳播してあちらでも此方でも同じ歌をうたひ出すのを聞くのは甚氣持のよいものである。又同じ歌を思ひがけぬ時思ひがけぬ處に發見することも珍らしくない。滅多に人に歌はれぬ寮歌を時に歌ふて見ると、間もなく誰かゞその同じ歌をうたひ行く聲を寢ながらに聞く事もあつた。

◎　これよりも面白いのは人と我と同じ歌を同じ時に偶然歌ひ出す事である。「ああ玉杯」とか「都の空」とか其他常によく歌はれる者なら何の不思議はないが、極稀にしかうたはれぬ歌がはからずも同時に人と我との心の底に湧き出づるのである。例へば北寮九番にゐた頃、朝起きて寢床を上げながら

武成の昔ありきてふ　野邊に狂へる春駒の

と微吟してゐると恰度同じ時南寮の方から全く同じ歌を高唱しながら洗面所に向つて行く人の聲を聞くのであつた。

又何か寮歌をうたひつゝ獨り表から歸つて來ると、寮のどこかの室から同じ歌の他の節を聲高く合唱してゐるのを聞く事が屢々あつた。實に屢々。偶然として抛ち去るにはあまりに屢々であつた。

何か一種の心持が絶えず風の樣に寮内を流れてゐるに相違ないと思はれる。古い寮歌に曰く

まだ春淺き岡の上　若葉の蔭に一張りの
千すぢの琴ぞ懸りたる　その緒にめぐる若き血の
たぎるや高き自治の歌

千すぢの絲は殊に共鳴りしやすい。一つの絲が鳴り出せば、やがて皆が同じ調子を以て靜かになり出す。或は又一つの風に吹かれると、あれとこれと不思議にも同じ調を奏で出すのである。

◎　寮歌が最も寮歌らしく歌はれるのは浴場と舊寮の廊下とで歌はれる時であらう。浴場では練習を終へて來たばかりの野球の撰手が一人二人歌ひ初めると歌は忽ち數十條の琴の緒に響いて、濛々たる浴場内悉く豪快な壯烈な歌聲ばかりで滿たされてしまふ。かくの如き強い壯嚴な聲は決して他の所で聞く事は出來ないであらう。

月夜などに、電燈が消えてから暫くグラウンドを散歩して寮へ歸つて來ると、寮内上も下も全く森閑としてしまふてゐる。凡ての自修室も寢室も悉く燈消えて眞闇、唯長い闇い廊下の所々に豆ランプの灯がつまらなさうに薄暗く點つてゐるばかりである。見馴れぬ人が來て見たらどんなに物凄い處と思ふだらう。陰々として殆音も無い。この時聲を擧げて歌ふても見よ。唯一人の咽喉から出る聲でも壁にひゞき天井にひゞき床に響いて、恰も何處かに隱れてゐた百人の軍隊が一所に聲を合はせて歌ひ出したかの樣に聞こえる。全寮舍の隅から隅迄悉くわが歌の聲に響き渡る。

同樣に自分が寢室に横はりながら、わが友の力ある强い歌を聞きつゝ眠りに落ちて行く時も誠に氣持がよいものである。

◎　年々十種ばかり宛新らしいのがふえて行くので、寮歌の數は餘程多くなつて來た。その中多くの歌は夫々色々の思ひ出を有してゐるのが面白い。

「青鸞精を啄みし色清艶の春の花……」

これは入寮當時の浮き上つた氣持を思ひ起させる。新入寮生の爲に寮歌を教授すると云ふので二階の廣床に多勢集まつて行つた時、まづ初めにこの歌が教へられた。何の事か意味は少しもわからぬが、此の歌をうたふ度毎に入寮演說だとか護國旗だとか入學式だとか云ふ樣な事柄とゝもに、その當時の落つかぬおづ〳〵した心地が歸つて來るのである。

「太平洋の波の穗にたなびく雲や小紫……」

この歌を聞けば一年生の初めてのコンパの夜、對室の精悍な星君が机の上に坐つて

武骨な一高聲を張り上げて歌ふた事を思ひ出す。

「比叡の山の石だゝみくづれて早き人心……」

これを歌ふ毎に一年のクリスマスの夜、二人の友人と机を圍んで夜通し語り明かした時の氣持になつてしまふ。

「あゝ渾沌の闇の色洶湧狂ふ瀾の音……」

これは甲府へ行軍に行つた時、宿舍の二階で長岡君から敎はつた歌である。これを歌ふ毎にこれを聞く毎に、その時の心持に立ち歸ると同時に此の淡白な友達の心を思ひ起さぬ事はない。

他にも概ね凡ての寮歌は夫々何かしらそれに伴ふ聯想をもつて居る。今でさへかくの如き思出があるとすれば、十年二十年或は三十年の後に於て「御空に星の冴ゆる夜は……」など、歌ひ出せば果してどんな氣持がする事であらう。

星

◎　入學して最初に敎室に行つた日には、今後一年間御厄介になるべき先生方が一人々々お出でになつて敎科書やら其他授業上樣々の注意を述べて行かれたが、其時初めから五六人目に一人の小柄な痩せた先生が御見えになつた。

この先生は壇の上に立つて吾等を御覽になるや否や、ぱち／＼／＼と速射砲の如く十數回瞬きをせられた。急に可笑しくなつたので頭を伏せて秘かに笑をこらへたが、それと同時にこれがあの數學の數藤先生であると云ふ事を直覺した。最尊敬すべき先生として僕はかねて兄から數藤先生の噂を聞かされてゐたのであるが、その先生を今目の前に仰ぎ得るに至つては又一種の光榮を感ぜずには居られなかつた。

これが數藤先生にお目にかゝつた最初。以後二年間敎室内で毎週二時間宛お目にかかる事が出來たのである。

先生はお話しぶりから御教授ぶり迄誠に淳々として溫厚謹嚴なお人柄であるが、僕に取つては同時に欺くべからざる事刄の如く秘すべからざる事氷の如く思はれた。御前に出て襟を正さずには居られなかつたが、又同時に最慕はしいなつかしい先生として敬服せずには居られなかつた。

◎　若し數藤先生が御名の如く數學の先生でなかつたならどんなに嬉しかつたであらうか。頭の惡い僕は三年の間數學の爲に隨分苦しまされた。平常の宿題に、試驗前の理解に、もし之が無ければ他に愉快な好きな仕事をして送るべき夜々を、問題紙と睨め競をしたまゝ徒費してしまふた事が幾度あつたか知れぬ。數藤先生であるからと思つて强いて勉めても、出來ない問題は出來ず、いつ迄立つても數學は好きな學課にはなれなかつた。

されば數學の試驗の時程心苦しい時は無かつた。何時も手の着けやうも無い問題が必ず一つはあつたが、他の問題と雖も元より立派な出來と云ふ事は出來ぬ。時間が來て貧弱な薄つぺらな答案を先生のお手元に差出す時何とも云ひ難い悲しさが心の底から湧き上つて來る。自分の不成績を歎くのではない。この貧弱な輕い答案紙を御受取りになつて先生がいかに不滿足に思召さるゝかを思ふ時は御前より消え入りたい許り悲しく濟まなくなつて來る。

殆何時もこんな試驗を受けてゐたのに拘はらず、先生は遂に一度も注意點をおつけにはならなかつた。今度こそ免れまい、又も先生の御心を痛めまつゝたかと思ひつゝ、心も消えんばかり恐縮してゐると、注意點の黑雲は僕の上をずつと過ぎて行つてしまふのであつた。いつも左樣であつた。けれども僕はまづ助かつたと喜ぶ事はどうしても出來なかつた。免れた所に寧ろ注意點以上の苦痛と相濟まぬ心とが强かつた。

僕ばかりではない。云ひあふて見ると誰も皆同じ心を持つてゐるのであつた。先生の御心を痛め申さざらん爲、吾々一同數學の注意點を取つてはなるまいぞと相戒め相謹しむのであつた。

◎　數藤先生に關して一つ僕の自慢のうれしい記憶がある。それは二年の時先生の授業のある日毎に朝早く行つて教室を掃除したことである。實は他の組でこうしてゐる

無名の生徒があるが先生は之を非常に喜んでゐらつしやると云ふ事を人傳に聞いたから自分も之を眞似ざるべからずと思つてやつて見た。

冬から學年の終迄毎週水曜日と土曜日の二度であつたが、人が未だ多くは起き出でぬ頃自修室の掃除に先つて水撒きと雑巾とを持つて教室に出かける。そして十枚の黑板を拭ひ床の上に水を撒き、もし時間があれば尙友人の机も皆拭ふて置く、冬の間は隨分手の指も痛い位冷たい事もあつたが、唯先生がお喜び下されば滿足であると思ひながら務めて居た。偖學校が始まつて再び教室へ行つて見ると黑々と光つてゐる塗板は我ながら快よく見える。それよりもよし御顏には現はし給はねど先生の御滿足を思へば暖かな歡喜が油然として心の中に湧き上るのであつた。

◎　三年になつた時もう先生に教はる事が出來なくなつたのは殘念であつた。其後は時々教室の廊下などで御會ひ申して懷かしい氣分を頂戴する許りであつたが、廊下で御會ひ申すのは大抵朝の一時間目であつた。他のどの教授方よりも最早く教室にお出でになるので僕らは少し遲く出掛けるとお目にかゝれない位であつたが早い時は決まつておあひ申すのであつた。向ふから黑い教授服を召した御姿が靜々と見えると思はずも襟を正したくなる。冬の間面倒な爲に常に羽織の紐をだらりと垂れたまゝで居たが、この時は惡い事をしたと思ふ。が今更結ぶわけにも行かぬからそのまゝでお辭義をする。すると先生の御目がどうも僕の羽織の紐に注がれてゐる樣な氣がして恥しくて堪まらぬ。明朝は心得ませうと思ひながら其時になるとつい忘れてしまふて又同じやうに濟まぬ事をしたと後悔するのであつた。こんな事が數日續いた後僕は決して羽織の紐を垂れたまゝでおかぬやうになつた。

◎　三年生の最後の試驗が終つて四日目。われ〳〵二部卒業生一同は永らく御世話になつた諸先生を上野鶯溪の伊香保にお招待申してその謝恩會を開催した。夏の雨がしと〳〵と降りつゞけて居た晩であつたが、そこの大廣間には師弟合はせて一百數十人がずらりと相並んだ。瀨戸先生を初め諸先生方は正面の一列。生徒一同は他の三面に畏まつて列座した。

この時數藤先生が御出席下さつたのは吾等一同の深い喜びであつたが、殊に七八人

の先生方のお話に次いで先生も亦起立せられた時は更に々々大喜びに喜んだ。すると先生の隣席の森惡童先生も一所にお立ちになつて

「諸君！　數藤さんが演說せられる事はめつたに無い事だからよく謹聽し給へ」と云つて野次り給ふ。數藤先生はにこ〳〵しながら森先生を抑へて、偖いつもの御講義の際に於てありし如く靜かな御言葉を云ひ直し云ひ直し進め給ふのであつた。殊に小さい御聲は丁度先生と對角線の位置に居た僕の耳に容易に屆きかねたが、耳をすまして承はれば

「私は寄宿寮の催にも十四五年つとめてゐる間指で數へる程より出た事はありませんでした。晩餐會に一度と、こんな謝恩會に四度ばかりであります。今度は三部の謝恩會にも出ませんでした。それに今夜出て來たのは何となく懷しさに堪えぬものがあつたからであります。諸君と敎場で會はれなくなつてからもう一年になります。その間敎室への路で時々會ふて敬禮を交換してせめてもの慰として居りました。今度からそれすら出來ませぬ。本郷通で時々遇へるかどうか位のものでありませう。何卒今後の三年間も御達者で御勉强なさらん事をねがひます」

ふかい御感情の井戸の底から小さな釣瓶を以て汲み上げるやうにそろ〳〵とかく語り給ふた。御聲より察すれば御心の中必ずや涙潛々たるものがあつたに相違ないと存ずる。容易に承はる事が出來ない尊い御言葉。われ〳〵は平伏して之を承はつて心の奥の寶殿に大事に大事に藏ひ込んだ。

この尊い餞別の御言葉に接し、吾々は唯此の御强健ならざる御身に永へに安らかと幸との豐ならんことを祈るのみであつた。

◎　處がその翌日の事であつた。午後所用あつて小石川の林町迄行つた歸り道、指ケ谷停留場へ出る道の突當り丁度日蓮宗の石碑の立つてゐる所へ來た時、彼方の辻から禮裝し給ふた數藤先生が出て來られて二人殆ど突き當るばかりであつた。同じ道をお伴して行けば先生は先づ兄の大學卒業の喜を祝はれたが、次で僕が所澤へ行つた話を申し上げると「それは善かつた……それは元氣な……同室者とは誰々ですか」など仰せられた。何處迄もお伴申したかつたけれども遂に指ケ谷の停留場の所へ來ると「私

はこちらへ行きますから」と丁寧に仰しやつて白山の方へ曲つて行かれた。

◎　先生のお側に居ると夏の夜空の一方に煌々とまたゝきながらかゞやいてゐる星の光を見上げる心地がする。明るい光に心の奥迄照らされて無上の嚴肅の感を催うすと同時に、又容易にお側を立ち去りがたい懷かしさと暖かさとを覺えるのである。凡ての二部の先輩が數藤先生數藤先生と云つてお慕ひ申してゐるのと同樣に、僕も亦心を献げて先生をお慕ひ申さざるを得ぬ。

二年の間とは云へこの先生の御薫陶に預かり得たことは僕の向陵生活をして、かく幸福にかく惠まれし者とならせた一つの大きな力であつた。

重ねて祈り奉る。この御健康ならざる先生の御身に天の幸と惠と彌多からんことを。

……

附記

大正四年夏八月二十二日。某新聞の文藝消息欄に數藤五城氏逝くの文字を見た時僕は心臓を氷刀で貫ぬかれた樣に愕いた。

閲

欠

嚶鳴（續）

●向陵を偲びて

大正二年九月、秋風と共に又候都へ入つた。是れ第四度目である。第一回の入京は最嬉しかつた。實に意氣軒昂たるものがあつた。これ柏葉章の帽子を被らんがために來たからである。第二回の入京、第三回の入京は故郷へ親しき人々を殘して來た悲哀があつたにせよ、尙嬉しい喜ばしい望があつた。それは向陵風香ばしき所に多くの友達が待つて居てくれたからである。新らしい一室を我々のものとしてこれから一個年の愉快な生活を初める望があつたからである。コンパを開いて寮歌を高唱する事が出來る望があつたからである。

此年第四回の入都。天下著名の博士達の前に出て最高い學問を修むべき大望があつたに拘はらず、心の中には何らの愉悅あるなくむしろ重い悲哀の雲に包まれてゐるの

閲

欠

であつた。

三年間着なれた柏葉章の帽子を脱ぎすてゝ、その代りに無趣味な角帽を頭に被らねばならぬとは何たる悲哀であつたらう。古びて裂けてはゐるけれど此の白二條の帽子は天下に何者を誇示するか。一見揚々たる風はあれどもかの角帽は何野郎の代名詞として用ゐられてゐるのであるか。僕の頭には白二條の帽子が最よく落付く。これを脱いで角帽を被ると云ふはむしろ屈辱を被るのである。武士が帶刀を取上げられたに等しい屈辱である。

上京した日、夏休中預けて置いた荷物を取る爲に早速寮へ行く。西寮の二階から二包の荷物を下して來て、運送屋に曳かせて一所に出て行く。分館の並木の傍を通り、廣庭の大木の櫻の枝の下を潜つて愈々門を出た時は、大石内藏之助が赤穗の城を開け渡した時の心持も偲ばれて暗に泣きたい許りになつた。門を出てふり返れば、其の門も門衛も植物も銅像も本館も大時計臺も最早自分のものではなかつた。

運送屋の車は小石川の片隅のある小さな家屋の前に停まつた。その中で自分の荷物や道具を整理しつゝあつた時は、愈悲哀の氣分に頭を抑へつけられて丸で一家零落の悲運にあふた樣な氣になつてしまふた。此處がこれからの自分の宿になるのであるか。何れを見ても語り合ふて氣持のよくなる友人の顏は見えなかつた。懷しい寮歌の聲々は何處の壁からも響いて來なかつた。全く零落である。

大學への往復に常に高等學校の建物が眼につくが、落第したのであつてもよい又あの建物の中であの先生達から敎はりたいと思つた。いつ迄もあの鐘の響きによつて敎室へ入り、あの時計の音を聞きながら眠りに入りたいと思つた。

例に依つて廣い本郷通りを一列に行進しつゝ足駄を引ずつて行く人々の一群を見受ける。美しくて堪らん。自分も昨日に返つてあの仲間に入りたい。どうしても昨日の方が善い。

時々夜分に寮へ行つて見る。散歩から歸つて來た寮生の一組二組が木の間隱れに並んで行くその邊りから强い寮歌の聲が聞えて來る。三階造りの舊寮の建物はその一階二階三階の窓々から灯が漏れて丸で不夜城の樣に美しく而も嚴かに高く聳え立つて

ゐる。その中で大勢の若者が嬉しさうに話しあふたり書物を讀み耽つたりしてゐる。時々扉を強く閉める音や廊下を踏みならす高い足音などが聞える。自分も向ふの玄關で下駄を脱いでその樂しさうな仲間に入つて行けるのであつたらどんなに愉快であらう。然し自分は最早此處の住人では無い。淋しい嫌な宿へ歸らねばならぬ。そこには誰一人高潔な愉快な話を交へる相手は居ない。共に笑ひ共に涙を流す友人は居ない。其處ではこの勇壯なる健兒の歌を聞く事は出來ない。遊冶郎が杯を手にして微吟する下品な歌聲ばかりが聞える。僕に取つては宿りはいつ迄も向陵で無ければならぬ。友は柏葉兒でなければ無らぬ。歌は寮歌で無ければならぬ。

●第二學生集會所

毎日々々顔を見合はして共に歌ひ共に語りともに笑ふて居た吾々の仲間の約半數は理科大學生となつて本郷に止まる事と成り、殘りの半數は襟にAの章を附けて駒場で學問をする事となつた。

本郷に殘つた吾々同志は割合に顔を見合せる機會が多かつた。殊に同じ教室で實驗する事が出來る者達は、朝早くから夕晩く迄互に野次りながら賑かに樂しく勉强する事が出來た。學校の實驗室から一所に逃げ出して池の畔の藤棚の下で休みながら長閑な長い時間を忘けた事も度々あれば、又學校が終つてから、同じ池の畔の巖の上に腰をかけて取とめの無い話に日が暮れるのを忘れた事も決して稀ではなかつた。この巖の上に友達とかうして座りながら、靜に波紋を描いて居る黑い水の姿を見つめて居ると、魂は飛んでライン河上の巖山に昔話の夢を見てゐる心地になつてしまふ。新綠の樹は大きな葉の影を水の上に落してじつと項垂れてゐる。一町先に電車の軋りありとも思へぬ靜けさ。この靜かな空氣の中に心を放ち魂を融かし込んでゐるのは此上もなく好い氣持であつた。

時に駒場の友達が見たくなると、又候午後の實驗を失敬して電車で走つて行く。彼等もその蒸餾の手、解剖の刀を措くに勇なる決して吾々に劣る者ではない。則ちそこの草地の上に腹這になつて暫く會はなかつた間に溜まつた種々の物語を交へる。或は立つ

て大樹の森蔭を歩き廻つたり、廣々した原の大きな落日を眺め合ふたりする。

ある時は本郷と駒場と兩方から尾久に集まり合ふて隅田河の上で秋の一日を壯遊した事もあつた。蘆洲の間に棹を取つてあちらこちらと漕ぎ廻りながら、ひた〳〵と寄せ來る滿潮の上に赤い太陽の沈むのを前にして、舷を打ちつゝ心ゆくばかり歌ひつくした。僅の時間乍ら彼等と此の歡を共にしてゐる間は、全く天下に何者をも憚らなかつた當時の我々に立返つて、無味乾燥に陷らんとしつゝある近頃の生活に幾許の清氣を注入したかわからなかつた。現に彼等と遊んだ後一週間許りは何となく勇ましい生命ある其日々々を暮らすことが出來るのであつた。

彼等と相見ざる事半月一月に及んで來ると、漸く心の中が乾燥して冷たく固くなりはじめる。心の中には月の光も曇つてしまひ鳥の聲も聞えず、唯表紙のちぎれた字書や硝子道具の缺片や藥の空罐などがごろ〳〵ところがつてゐる許りで物足りない事甚だしい。

折角高等學校卒業間際に高潮に漲つた吾々の情感は吾々が相見ずして遠く離れてゐる間にどうも沈滯しがちになつて來る。その時張りつめて居た心の弓弦も殘念ながらだん〳〵弛んで來る樣に思はれてならぬ。吾々は都合がつく限り出來る丈顏を見合はせて共に歌ひ共に勵まして向陵生活の大事な續きを追はねばならぬ。

此の考は誰しも皆抱いて居たものと見えて、吾々の一人が月に一度宛位是非都合をつけて集まつて一所に話しあふ事にしやうでは無いかと云ひ出した時、本郷の者も駒場の者も皆々直に賛成して早速どこかに集まらうと云ふ事を約束した。

頃は恰度大正三年の春の央であつたが、我帝國臣民の中最忠直なるべき階級に驚くべき腐敗事のありし事が暴露され天下の人心の糜爛その極點に達したかと患へられた時であつたから、一面國家に對する吾々の自覺を促がし合はふと云ふのもその中に含まれた一つの目的であつた。

撰んだ場所は大學の第二學生集會所のある小さな一室。集まつた人數は十人足らず。少數ではあるがかねて苦樂を偕にしめい〳〵心を知りあふた仲間。互々に何の蟠りもあるなく古郷に歸つた積りで心易く語りあふた。

帝國の將來を思ふて見れば今更吾々がうか〳〵して居られぬ事が痛切に了解される。うか〳〵するなと云ふのは然し實驗を逃げ出して巖の上で晝寢をするなと云ふ樣な淺い意味で無い事は勿論である。お互に魂の曲つた所を削りあひ、友達の心の美しい香を吾身にも移して、自らをより强いより潔い人間と成し、吾帝國が日の丸の旗を掲げて世界歴史の大海に永遠の船出をする時、その熟練なる一水夫として己が身を獻げる準備をしなければならぬ。その爲に吾々は一層の奮勵努力を要する。

一宵三四時間の快談。吾々の物語はそれからそれへと移り移つて環の盡くる所もなく、感興は汲めば汲む程益湧き出で〻訣る〻に及んでは未だ多くの云ひたい事を云ひ殘した遺憾を感ずるのであつた。

月に一度位といふ豫定であつたが、迚も來月迄は待たれぬと云ふので月の中にもう一度集まらうと云ふ事になる。度重なれば重なるに從つて興味は愈深くなり、この會合に對する期待も益々大となり一ヶ月に二度三度と頻繁に開かれる事となつて來た。

駒場の者達はその度毎に遠方から出て來るのであつた。夏秋の涼しい夕は元より、冬の寒中雪の深い夜でもかれ等は更に憶せず遠い惡い道を遙々とやつて來た。そして會が終れば夜遲く又吹雪の中を遠い駒場の原の奥迄歸つて行くのであつた。何者の力もこの會合に對する吾々の吸着力を妨ぐる事は出來なかつた。われ〳〵は此處に吾々の生命の源を見出して居たのであつた。

かくて前後凡そ三十回近くも開いたであらう。その中兩三度は追分の梅月で栗饅頭を頰張りながら談じあふた。又一二度づ〻麻布の天文臺に於て、又駒場の學生集會所に於て催ふした事もあつた。其れ以外は常に本郷の第二集會所の一室。七八人が恰度入れる位の手頃の室である。少しも飾氣の無い極めて質素な、露西亞の片田舍の家屋を想はせる樣な好い室。これが大學生活の間われ〳〵の生命を培ふて吳れた所、又無味乾燥なるべきその間を向陵三年の延長として能く幸福によく有能に送らせて吳れた最紀念すべき所であつた。

此處へ晩の五六時頃から集まつて二皿か三皿の粗食を共にし、鹽煎餅や岡埜の最中をかぢりつ〻各自思ひついた事や疑ふべき事などを盛に語りあふ。皆の顏の表には

眞面目な相が現はれる事もあるが、寧ろ欣然たる微笑を見交はす時の方が多い。この時間程心が落付いて暢々とする時はない。心の故郷とは此の處であらう。

殊に冬の寒い夜になると、室の片隅に暖爐が活々と燃えてゐる周圍に椅子を運んで行つてそうして話に醉ふ。このまゝ永久の死に入るとも亦憾む所はないのであつた。

色々な話が取りかはされる。何時も最むづかしい問題を持ち出すのは亞蛭である。人間は何故に生れて來たのであるか。人間は何故に結婚しなければならないか。こんな問題はいつ迄かゝつても吾々の頭では解釋がつかなかつた。多くの男子は何故に口髭を貯へてゐるのか。ある人々は何故に博士論文を提出するか。これらは何れも皆人性の根底を明かにするに就ての必要な大問題であつた。解決はつかないにしても、皆で頭をひねつたり論じたり駁したりしてゐる中に愉快と滿足とがあつた。

ある時は人類はその進歩發達の爲に矢張り戰爭を行はねばならぬと、決定した事もあつた。又何故に世間に惡人があるのかと尋ねられた時、ある一人が人間は善をするも勝手惡を行ふも勝手だと答へたので「こりや話せる」と贊成した事もあつた。其他宿命論や自由意志論や宗教論議や道德說や樣々のむづかしい問題が議論せられた。

タゴールの書物を紹介する者もあつた。德富健次郎さんの「勝の哀」を讀んだものもあつた。かねてゴルドン將軍に心醉してゐる一人は、いつも〳〵ゴルドンを口に出して、その高潔なる品格やその慈仁やその義に赴き不義を憤るの旺なる或は神に奉ずるの敬虔なるを嘆美して、我日本にも斯人無かるべからずと云ふてゐた。多い時は十二三人、少ない時は六七人。常に口を緘して聞いてゐる獏山もあれば、例に依つてよく奇言を挾む能美もあり、四方八方の論難を一人で引受けて戰ふ亞蛭もある。其他誰も彼も皆有の儘の心をなげ出して話し合ふて見れば、今迄は別に深い思想も持つてゐない唯一介の學究子と見えて居た者も、實は中々に眞面目な人生の探求者であつた。豪放不羈の快男兒としか見えなかつた者も、胸の中には死の爲に裂かれた古い友情の手傷を忍び兼ねてゐるのであつた。

初め亞蛭が時局に憤慨してこの會合を主唱し出したのは何らの恩惠であつたらう。われ〳〵の間は更に更に親しく結付けられ、心と心とは全く融け合ふて玆に大勢の兄

弟、大勢の第二の自分を發見する事が出來、向陵三年の延長といふ當初の目的は十分に達せられた。

眞面目なむづかしい話はやゝもすると脇道へ足を滑らして呑氣な閑談に一夜を過ごしてしまふ事もあつた。靈性問題から心靈の奇現象に移り妖怪談に移り遂に盜賊の話に落ちてしまふた事もあれば、高等學校で先生から牛耳られた思出や今の大學の博士達の逸話に興がつた事もあつた。

何の話が湧くにせよ、一として愉快ならぬ夜は無かつた。樂しい夜は刻々更ける。十時になると大學の凡ての門が閉鎖されるのでその十五分前に給仕がぬつと顏を出して廻らぬ舌で「もう十時になりまつから」と云ふて來る。殘り惜しいが止むを得ぬ。ばらばらと立上つて表に出る。ほてつた顏に夜の空氣が冷たく當る。全地を支配してゐる闇黑の中に、宏壯な理科大學の教室が城廓の如く高く大きく聳立つて見える。その地下室から灯がちらと見えてゐるのは田中館さんでも實驗してゐらるゝのであらう。

死よりも靜かな大學の構内を彌生町の裏門から拔け出して、高等學校との間の坂道から本郷通りへ出る。このまゝ此處で南と北とに訣れてしまふには餘りに殘惜しい。集會所で云ひ殘した話の續きをしたり、この次に集まる日取の相談をしたりしながら、三丁目迄一同々行する。本郷通りをかうして皆で肩を並べて濶歩して行く所は全く以前の心持である。短かい道程を三十分以上もゆる〳〵と歩いて、更に三丁目の四つ角に暫し立ち止り、何臺かの電車をやり過ごした後初めてわかれるのであつた。

この小さな質素な會合。然し吾々に取つては王侯の饗宴に列する以上の愉快があつた。大學三年間の生活の泉、吾々は莫大の恩惠をこの所より汲んでゐる。若し吾々をして檢微鏡の樣な或は鍬の樣な人間たる事無からしむる者あらばそれは此の泉より湧き出た清水であつたらう。

おもふどちまとゐせる夜はからにしき
たたまくをしきものにぞありける

——古今集——

●蘆之湖畔へ

一　天幕旅行の思ひ立ち

我々の生命の泉であつた此の小さい質素な會合。一夕三四時間の同座に只管歡喜と滿足とを貪りつゝあつた間に、一片の悲哀として頭の中を曇らしてゐたのは、時間が盡きれば折角こゝ迄織りなした綺羅の錦を斷ち切つて各〻別の家路に立ち別れねばならぬと云ふ堪えがたい心配であつた。

時間に制限される心配なく思ふ存分長座してこの快樂と滿足とを十分味ふ事が出來れば如何に面白からうと思ふた時、我々はその機會さへあれば之を捕へて逃がす事は無かつた。

近郊に一日の清遊、遠くの山に數日の旅行。前後七八回のこの催しに、吾々はその望を充たす事を得た。ある時は粕谷の草堂に野の大人を訪ねてその扉の開かぬまゝに、井の頭へ道をまげてその森の中で夏の涼しい一日を樂しんだ事があつた。玉川の水、大森の梅、何處へ行つても夫々の興趣は豐かであつた。

更に鎌倉の春の夜語に七百年の昔の夢を忍び、三崎の濤の音に夜通し枕を撼かされた事もあつた。城ヶ島の日の出の美觀も、追濱飛行場の心厚き歡待も、乃至は横須賀無線電信所で闇の中から大喝されたのも、永い思出の美しい種子となるであらう。赤城山上の三日は更に數多き憶出を殘してゐる。大沼湖上の舟遊び、猪谷旅舍主人の氣に入つた接待振り、牧牛の悠悠たる緩歩、山の峽より湖面を渡つて過ぎる白雲の姿。豪雨の夜半猛烈なる雷電に襲はれた時は今宵が生命の終りかと慴れたが、考へ物や謎や幽靈談の間にうと〳〵と眠に陷つたのは氣持が良かつた。

これらを通じて大學三年の間に最愉快であつたのは最初の旅行として箱根蘆の湖畔へ天幕を擔いで登つて行つた時であつた。此時程愉快な多幸な旅行はなく、其後何時此を憶ひ出しても云ひ難き快感に今更心の躍るのを禁じ得ぬのである。

二　水遠山長

學生集會所で話してゐる丈では思ふ存分樂しむ事が出來ないから泊りがけで何處かへ出かける事にしやうと云ふ相談が初めて起つたのは、大學生として最初の夏休を終つて來た秋の頃であつた。恰度十月の十七日の神嘗祭が土曜日になるから翌日曜日と二日掛で箱根へ行かうと云ふ事になつた。而も唯の旅行ではつまらぬから高等學校から天幕を借りて來て露營をして見やうと云ふ事に相談が決まつた。

十月の十七日朝六時前、新橋停車場へ旅裝して集まつたものは八人であつた。理科大學から四人と農科大學から四人。理科の四人はあひるとぶくさんとうさぎとたぬき。農科の四人はおん大とろばとのみと山ねこ。お伽噺の獸の旅行の樣であるが皆本當だから仕方が無い。あひるは身體の恰好が何處となく鴨によく似てゐた。ぶくさんは身體中ぶく〳〵と肥えていかにも福々しさうであつた、のみならず心迄も福々と肥えて居つた。うさぎは名の通り大きな桃色の耳を持つて居りたぬきは泥舟に乘せられたやうな不景氣な顏をしてゐた。

おん大は御大の樣にむつゝり頑張つてゐた。ろばは驢馬の樣な眼と頰とを持つて居り又人を蹴る事が好きであつた。のみは蚤によく似て居り山ねこも山猫によく似てゐた。

これで八人揃ふた。この他理科の方からはきつねと云ふ秀才も主腦者の一人として行く事になつて居たが、急に風邪にかゝつて行けなくなつたのは殘念であつた。然し彼はバイナップルの罐詰三個を提げてその日早朝から新橋迄皆の見送りに來て居た。六時五分の發車迄にもう十一分しか無いと二三人の先着者が氣をもんで居た所へ、ぞろ〳〵と一時に皆が打揃ふたのは先づ好都合であつた。一人二圓づゝ突き出して湯元往復を呼び續けたのは、札賣の女を二十三錢の釣錢で少なからず困らせた。都合よく列車に乘り込んで悠然とすまして居た八人の窓の前を一人の驛夫が

「どなたか切符を落した人はありませんか……」

と呼びつゝ行つた。何處のあはて者だらうと笑ひあふてゐたが、突然うさぎがあは

てゝポケットを探し初めたかと思ふと「僕かもわからん」と心配さうに云ひ出した。果してうさぎの身體中何處をさがしても切符は發見されなかつた。その間に列車の端迄行つた夫の驛夫が引返して來たから、之を呼び止めて暫く交渉した結果湯元往復の切符が無事にうさぎの手元に歸つた。これが最初の漫錄であつた。

八人の中、朝の食事を認める時間を持たなかつた者が二三人あつたので、食物を携へた者は各之を取り出して彼等に提供した。ジヤムパンと食パンと梨とお菓子とが出た。

「向ふ朝飯ではどうも腹が充たぬ」

とろばが不足を云ふた。向ふ朝飯には少々故事來歷がある。

前日の事であつた。理科の二人がわざ〳〵學校を早く切り上げて駒場迄打合はせに行つた時、第一回からの皆勤者の一人である獏山が少し遲れて相談の圓座の中へ割り込んで來たが相談には耳も貸さずに

「おいすゞき煙草を吳れ」

と叫んだ。

「煙草は止したのぢや無いのか」

と云ふと

「ん。煙草を買ふ事は止した。これから向ふ煙草にするのだ」

平氣な顏をして答へた。獏山は痔の爲に今度の旅行には最初から御免を蒙つてゐたが、彼の代りに向ふ煙草が一行に尾いて來たのである。

汽車は八人の寮歌を歌ふ聲を乘せて海岸を西へ々々と走つた。二時間餘りにして國府津着。そこから八人は小さい電車の車掌臺に窮屈に押し込められながら湯元へ向つて走つた。身體は身動きもならぬ程窮屈でも、口は至極自由であつたから、歌はうたふ、惡口は云ふ、漫錄も澤山出來た。

「腹は人に押されて痛い。肩は天幕の荷が重くて痛い。これこそ肩腹痛いと云ふのだらう」とぶくさんがまづい洒落を云ふ。洒落を云ふ點については誰も人に負けて居やうとはしなかつた。

よく晴れた秋の空は青く高く、田園は山に限られる所迄又海に限られる所迄廣々と延びてゐる。松の形、人家の色。水害に荒らされた沿道の田には稻が憐れに横はつてゐる。向ふの海の淺瀨には白い波が頭をもたげてまめに押し寄せて來て居る。

窮屈な電車は間もなく小田原の立派な町に着いた。われ〳〵は一旦此處で下車して樣々の用品を買調へねばならぬのである。電車を降りて暫く行くと金物屋が見つかつたから直に「鍋を一つ下さい」と云ふて入つて行つた。出して來るのを見ると、せい〳〵牛乳を溫める位の小さい奴である。成程さう思ふのも無理は無いが僕等の欲しいのは一時に八人前の御飯の炊ける程の鍋である。恰度手頃の奴が定價六十錢。蓋をつけて貰ふたら七十錢になつた。この鍋と蓋とは天幕借用の御禮として一高の旅行部へ呈上する事に相談を決めたが、然しこれが二年後の夏七月甲斐の山奥、甲武信ヶ嶽の森の中に若い身を山の犧牲に斃れた四つの屍を守りながら横はる事にならうとはその時誰しも豫想する事が出來なかつた。

鍋を釣るす針金を注文すると「これは御添物で御座います」と金物屋の女主人が云つた。それから我我八人の中一人も御飯を炊いた經驗のある者はないからこの人に御飯の炊方を尋ねた。尋ね方が要領を得てゐたから充分了解された。蓋が出來上つて鍋は新聞紙に包まれた。持つて出かけやうとすると主人が少々物足らぬ樣な顏をするので、何だらうと訝れば金七十錢をまだ拂つてゐないのであつた。代金を渡して後日の爲に請取を貰つて此處を立去つた。

八人の一部がかゝる事をしてゐる間に他の一班は彼方で漬物店に入つて罐詰を買ふてゐた。牛肉、福神漬、わさび漬、夫々若干宛。又御飯の杓子が入用だと氣がついて之を買ひに行つたら定價一錢五厘であつた。御大が「米は買つたのか」と注意すると米買當番は「ん。七十錢だつた」と答へた。

「一升がゝい？」とお、ん大は平氣でたづねる。

「いや。四升だ」と米買當番も平氣で答へる。すると米一升は金十七錢五厘。世間の模樣がだんだん判つて來てありがたい。

買つた許りの米を炊いて小田原の町中で晝食するわけにも行かんから、まだ少々時

刻は早かつたが此處で晝御飯を認めておく事にした。とある蕎麥屋を見つけて奥へ入つて行くと割合にきれいな座敷がある。上つて見ると壁に一つの額が挂かつてゐる。曰く「水遠山長」と。これから山の奥に天幕を張つて自分で米を炊いて食べやうとする我々に取つてはあまり有難くもない文字である。

「どうだ。もうこの室へ天幕を張つてしまふか」と弱い言を云ふものさへあつた。

蒸籠八枚の注文を出して大きな机の周圍に八人が並ぶとうさぎが雜嚢の中から新聞紙包を取出して机の上に置いた。開けるとおすしが出て來た。

「向ふずしか」と云ひながら御馳走に預かる。

せいらうの出來るのを待つてゐる間盛に漫錄が出て來る。一々速記者が欲しい位であつた。

せいらうが來ると何れの口も忽ち沈默に陷つてしまふ。おかはりの八枚を蕎麥屋の先生間違へて四つしか持つて來なかつた。次にうどんが來たが妙に石油臭くて終迄食べた者は無かつた。

お腹が出來たから又電車に乘つて湯本へ走る。單線の電車は中々のろい、某川のほとり、某山の麓、某村をよぎつて進む。空は益晴れて實に氣持がよい。

三　湖上の秋

湯本についた。降りた。これから歩かねばならぬ。いよ〳〵、重い天幕をかつぐのが大變である。しかし素直な人々の群は誰も不平をこぼす者なく替はる〳〵有志者が出でゝ之を擔ひながら山道を登つて行く。

四五町行いてある山の蔭に休みながら裝束を改めた。皆マント外套を脱ぎ洋服の上着も脱いで出來る丈身輕に裝ひ、その邊の竹林から竹を切つて來て天幕の擔竿を作つた。

天幕を擔ぐ者、その器具一式を擔ふ者、鍋を持つ者、米袋を提げる者、鑵詰類を提げる者、かくしてこゝに可笑しな一行が出來上つた。

嶮しい上に石ころ〳〵の舊東海道の道行は度々の休息を要求した。右手の方を

見ると二三町の谷向に何とかの連山が見える。その山腹に通じた一筋の道を三四の駕籠が登つて行く、あの駕籠が一つでも善いから谷底へころがつて見ないかなあと云つたが一つも落ちなかつた。

いやな石ころの道は中々長くて大に草疲れる。空晴れて日暖かに、天幕方の二人は流汗さながら浴びたる如く眉も睫毛もあらばこそ、汗は眼の中迄流れ込んで來る。天幕方許りではない、米方でも鍋方でも鑵詰方でもあまり變りがない。その他遊軍の者でも相當に防寒の用意をして來たから暑くてたまらぬ。旅は漸く苦しくなつて來た。

山に來た最初から見えて居た双子山が段々近くなつて來た。去年の十二月の末に全燒したと云ふ某村を通つた時ある茶店に休息してあめ玉を食べた。そこのお婆さんも火事に燒け出された被害者であつた。

その中に双子山がわれ〳〵の後方に見える樣になつたけれども而も山道は中々盡きさうもない。脚は益々草疲れる。強いて聲を張り上げて「羊腸の小徑は苔滑か」と叫ばんと欲するも息が切れて聲が續かぬ。一つ景色を見やうといふ口實で度々足を道傍に止めた。時には周圍が高い土堤で何ら風景の眼に映らぬ事もあつたが、實際遙の山と山との峽から小田原の平原が遠く廣がつた美しい大きい眺めの時もあつた。下の山々を見ると成程吾々が大分登つた事がわかつた。けれども上を見ると峠は中々來さうにも無い。一列の電柱が山を登つて立つてゐるがあの電柱こそ峠だらうと思つて行つて見るとまだその先にも高い電柱が續いてゐるのであつた。加ふるに道の歩き難い事はたまらぬ。「羊腸の小徑は苔滑か」ではない實は石滑かで、何十年何百年來東人西人の草鞋に踏みにぢられた平石は今は銅が光る如く赤く光つてゐる。靴は滑る。踏みつければ頭にひゞく。峠近くなつて土の道を踏む事が出來た時は蘇生したやうな氣持であつた。峠に立てば駒ヶ嶽が見える。その麓の方から遙に富士も見える。快哉を叫ばずには居られぬ。

駒ヶ嶽はよい山である。容々として動ぜざる君子の相あり誠に奥床しい形をもつてゐる。既に太陽はよほど落ちてゐたが山の處々が光を浴びて赤々と輝いてゐる。その他の部分は或は草で青く或は樹で黑く、殊に下半腹は芒がしげつて、その穗の爲に雪

が淡く積んだ樣にも見える。しかもそれが夕風に靡いて波の動くが如きは何とも云へぬ佳い眺めである。

日はだん〳〵西の山に落ちて見えずなり行く。夕風も身に寒く覺える樣になつて來た。而もあゝ水遠く山長し。

峠で汗を入れて坂を下ると元箱根町である。駕籠かき、旅人、紳士、外人、小學生等がうろ〳〵してゐる中へ吾々は妙な風態をして降りて行つた。船宿を探しあてゝ早速モーターボートを出すべく命じた。何處迄も金の無い貧書生と見くびられては末代の恥辱。假令山野に臥し生米を嚙つても湖丈はモーターボートを駛らさねばならぬと力んで大枚一圓四十錢を奮發した。

モーターボートで蘆の湖に浮かんで發動機の音勇ましく乘り出す。

船は靜かな水を切つてばく〳〵と一直線に進行する。誠に愉快。廣々とした湖面。それを限る者は皆山。眞正面には富士山が眺めて居る。右には駒ヶ嶽が座つてゐる。駒ヶ嶽の麓水に迫る所の森林はその影を湖水に黑藍色にうつしてその物凄き將に蛟龍の躍り出でんとするものあるかと怪しましめた。それにしても佳い眺め。外套で身を包んでゐるが湖上の秋風は中中冷たい。

日は益〻西に傾く。西の山の端の雲は赤く耀やき、東の駒ヶ嶽の嶺には雲が白く包みかゝつて來た。湖面には冷氣が風の如く吹き寄せて來る。わが乘る船が勇ましく進むにつれて底もわからぬ位青い凄い水はどん〴〵後に走つて行く。

この時誰か一人聲を揚げて歌へば——

Ich weiss nicht, was soll es bedeuten,
Dass ich so traurig bin;
Ein Märchen aus alten Zeiten,
Das kommt mir nicht aus dem Sinn.
Die Luft ist kühl und es dunkelt,
Und ruhig fliesst der Rhein—
Der Gipfel des Berges funkelt

Im Abendsonnenschein.

衆忽ち之に聲を合はせて高ずさむ。この歌この境、誠に興は深い。

日は全く無くなつた。心細くなつた、腹も餓じきを訴へ出した。けれどもモーターボートで靜かな湖水の上を走るのは誠に氣持がよい。幾らでもかうして駛りたく成丈け山遠く水長からん事を祈つた。

四　寒山の露營

人外の清境に清氣を呼吸する事數十分。漸く水が盡きて岸が近づいた。おや〳〵と思ふ間に發動機の音は急に止んで我々は岸の上に放り上げられた——丸で天國の門から浮世へ突き落されたやうに、又甘い夢から急に眼を覺まされたやうに、茫然として汀に佇んでゐたが、やがて名殘惜しい寶船を後にして八人は又重い天幕や鍋や米袋を擔いで歩き出した。岸邊に一軒の茶店があつたが、かう日が暮れてしまへば我々は前途を急がねばならぬ。

暫く樂をして居た八人の脚は最早歩く事を嫌がつた、肩も亦重い荷物を擔ぐ事を好まなかつた。然し止むを得ぬ。疲れた足と肩とをなだめつすかしつ道を急ぐ。石道ではないけれども急な坂道。兩側は密林。日は暮れて四邊闇し。心細からざるを得んや。行けども行けども坂道は盡きず林は開けず。足は進まず。而も今宵一夜の宿り家も無ければ命を繋ぐ糧食もまだ調ふては居らぬ。誰がその世話をして呉れるのか。

天上には星がきら〳〵と閃めき初めた。風は益〻寒く、右手の神山の頂きから雲がだん〳〵低く降りて來た。

漸くにして林は開け道は平になり、前面遠く姥子の村の森かと思はるゝものが見えて來た。最早前に立つ人の面も見えぬ位暗くなつてゐる。疲れた。ひもじい。

疲れてひもじい人の聰い耳に水の音かと思はるゝ者が聞えた。

「水。河？」

「何？あれは芒が風に擦れあふて鳴る音だ」

あゝ何といふ心細い言葉であらう。

「いや。どうも水の音らしいよ」
「さうぢや無い。芒の音だ」
「さうかなあ」
晦の夜は月何處にあるや求むべくも無い。顧みれば連山雲蒼々としてずつと下の湖面も早や夜の色に暗く包まれた。
「一體誰が天幕旅行なんか云ひ出したんだらう」
「あゝ泣きたくなつて來た」
「僕も悲しくなつて來た」
朧なる人の姿、悲しげな寒さうな聲。疲れ切つた足音。
「どうも水らしいよ」と又立止まる。
「さうかも知れない」
「兎に角此の邊に張る事にしやうぢや無いか」
「いや。もう少し良い所があるだらう」

二三の者は水であるかどうかを確かむべく道を外れた。殘れる者は小田原提灯に灯を點し、ある高い木に掲げて彼等の目標を作り自らその下に立止つて荷物を下した。かれらが芒を搔き分けて行く音がだん〳〵遠く聞えて行つた。
疲れ果てゝ叢の上に座つてゐる處へ探檢隊が歸つて來た。而も態々茶碗に水を一杯掬うて持つて來た。提灯の灯で照らして見ると白い瀨戸引の底に水が無色に透き徹つてゐる。
「飲めるよ」
「何だか少し變な味がするね」
彼等の報告に依ればこの芒の原の奥に天幕を張るに恰度恰當の所があるといふので直ちに其處へ天幕を持ちかける事にした。しかし姥子の村もあまり遠くなささうだから、一寸行つて此の川の水が飲めるかどうかを尋ね、その序に米を洗つて來ればよいと云ふので、三四人が鍋と米袋とを持つて其方へ出かけた。
殘りの者は荷物をすつかり擔いで芒の中を奥へ〳〵と分けて行つた。一町許り進ん

だ處に恰度八疊敷位の空地があつたから、愈々此處へ天幕を張る事に決定した。察するに川の邊らしく水の音は下の谷の底かと思ふあたりで鳴つて居る。

夜は眞闇、提灯の光が唯一の賴みである。その邊は芒ばかりで別に高い木も無いから寫眞の三脚を立てゝそれに灯を懸け、その傍で先づ我々の宿を作り初めた。大分面白くなつて來た。長い間吾々を苦しめた天幕の袋、やうやく之を開けば今宵の命の親がそこに悠然としてその尨大な姿を現はした。ぶくさんの建造主任の下に一同いそがしく立働いて天幕を組み立てる。竹を繼いで長い支柱を作り之を天幕の內頂につきさして大きな布の物體を持ち上げる。四隅からその裾を引張り所々へ杭を打つて綱で縛りつけると玆に立派な宮殿が出來上つた。

米を洗ひに行つた連中が歸つて來たと見えて遠くから「おういい」と呼ぶ聲が聞える。「おういい」と應へて提灯をふる。芒の音ががさ〳〵と近く鳴つて來たかと思ふと鍋を大事さうに提げた妙な一行が現はれて來た。

「この川の水は飲めるのか」

「飲まない方が好いといふ事だ」

米は姥子で水を貰つて洗ふたさうである。宿屋の女どもが書生が鍋をもつて米を洗ひに來たと云ふて大騒ぎして笑ふて仕樣がなかつたさうだ。

家が出來たからこれから大事の食物の方である。まづその邊りの叢や芒を刈り取つて焚火をしても危險のない樣に用心する。二三人の分遣隊がも一つの提灯を持つて薪拾ひに出かけた。先刻林の間の坂道を登つて來た時、路傍に木の枝が澤山折つて捨てゝあつたのを思ひ出したから其れを拾ひに行かうと云ふのである。折角困難して登つて來た道を又あの下迄下らねばならぬのは大事であるが、然し命の爲とあらば又止むを得ぬ。道々下りながら一寸の木の切れ端しでも見つかつたなら道のまん中へ出して置いて歸り途に拾ふて行く事にする。目的の林の間の道迄來るには餘程坂を下らねばならなかつた。提灯の光を賴りにそこ迄下つて枯枝を集めてゐると、下の方から人聲が聞える。かゝる時に人語は反つて物凄い。吾々は怪しまれぬ樣に又彼等を驚かし奉らぬ樣にわざと大聲を出して話してゐたが、彼等の聲はだん〳〵近くなつて、つい其處

迄やつて來た。話に依るとそれは姥子の宿屋の雇人であつた。

澤山の枝は持つて歸るのに困難であつた。帶を解いてそれで一束に括つて二人で提げて見たり一人宛で此れを擔いで見たりした。宛然かち〳〵山の狸樣である。荷物が重いのに氣を取られて、知らぬ間に長い坂道を登り盡くした。先刻立止つて水の音を聞きつけた所へ辿り着いて、其處から芒を分けて行くと向ふの低い土地の邊りの樹草が仄明るい。そこにわれ〳〵の宿營があるのである。

宿營に歸つて見ると旅の道具などばちやんと天幕の中へ運び込まれて家の模樣も整ふて居り、又鍋も丈夫な木を組み合はせて作つた三脚から小田原の景物の針金で吊り下つて居た。鍋の下の方は草を刈り土を掘つて立派な竈が出來て居り、今は焚き付けさへすればよい樣になつて居た。

擔いで來た枝を折つて薪をこしらへ出來る一方から燃やす。ぱつと燃え付けば暗い天地に此處一所丈の明るみが動く。火の子が洋袴に飛んで來る。定見の無い煙は此方へ來たり向へ靡いたりしてその度毎に誰かを苦しませた。細い枝ばかりどん〴〵燃えても大きい木には中々燃えつかない。七人がこうして鍋を取圍んで火を護つてゐると、一方では天幕の暗い中に提灯の灯を賴りに草の上にどつかと座り込んで木箸を削る人がある。「おい。何本こしらへれば好いのか」と初めに尋ねたきり、後は一言も出さずせつせと木の枝を削つてゐる。天幕の入口から覗くと丸でアイヌのおぢいさんを見る樣であつた。

寒い怖ろしい天地にも唯此處一間許りの處丈は、われ〳〵に取つて實に家庭であり又天國であつた。

色々笑ひ話をしながら御飯の出來るのを待つ。先代萩の小殿樣がこゝに八人も出來た譯である。一人の有志者が皆の茶碗を持つて川迄洗ひに行く。

幾度か消えかゝつて脅かした火の爲でも鍋の中はとう〳〵煮へ初めた。見よ蓋の間から白い泡が蟹の樣に吹き出して來るではないか。

「やあ吹いたぞ。吹いたぞ」聲を合はせて喜ぶ。金物屋のおばさんは吹いてから五分と云ふて居た。

「一寸開けて見やうか」

誰も皆開けて中を覗いて見たかつたが、金物屋で「男の人は皆中途であけるから旨く出來ないんです」と聞いて來た言葉を守つて、互に相戒しめて時機の至るのを待つた。凡そ五分も立つた頃幾らか薪の火を消して一同天幕の中へ入つて環座し、三脚から提灯を吊下げ又牛肉の罐詰と福神漬の罐詰とを開けて食堂の準備をした。やがて愈鍋が天幕の中に遷御し給ふ事となる。一同は平身低頭して之を迎へ奉る。一人が手を伸べ鞠躬如として蓋を開け參らせる。

「さあ。開けるぞ」鬼が出るか蛇が出るか。鬼や蛇が出てたまるものか。

八人は肩を張つて鍋に眼を注いだ。重々しく輕く蓋が開いたかと思ふと濛然と噴き上つた白い湯氣が忽ち狹い天幕内の空間に充ち渡つた。

「うまいぞ！」濛氣の中に――見よ。白い御飯が鍋の九分八厘の處迄ふうわり盛り上つて居る。

「萬歳」思はずも拍手喝采は小さい天幕を動搖せしめた。

、ろばが第一に杓子を取る光榮を有し、それから幸福な順序は右へ〳〵と廻る。何と景氣の良いこの濛氣よ。第一に御飯を口に入れたろばは「實によく出來てゐる」と激賞する。その通り御飯は硬からず柔かならず水加減も火加減も實に立派な滿點であつた。決して腹が空いてゐるから美味に思つた譯ではない。この御飯なら我々が何時何處で食べても決してまづい御飯ではない、否畏こきあたりの供御に献げても決して恐れ多い事も無い位であつた。

牛肉の罐も杓子の後を追ふて右へ〳〵と廻つた。景氣の好い白い濛氣の中に、暑い御飯をふう〳〵吹きながら食べる口の音が高い。そこで自慢が初まる。

「これは全く火の燃やし方が、うまかつたからだ」

「否。米の分量と水加減とが良かつたからだ」

「さうぢやないよ。米を洗ふてゐるのを見物してゐたのが、うまかつたからだ。」

「なあに。米の磨ぎ方が善かつたんだい」

「こんな調子だと女のする仕事位何でも出來るぞ」

全くだ。生れて初めて、こんな暗い不便な所でやつても斯う美事に出來るのである
から。漸く鍋の底が見えて來た。少しも焦げては居ない。何たる美事な出來榮であら
う。

大きなお茶碗に二杯半づゝは八人の餓じい腹を滿足せしめた。鍋の中も丁度きれい
に無くなつた。米の分量の測定も實にかくの如く計量的に綿密に出來たのであつた。

「さあ今度はパイナップルだぞ」

八人の食慾は果然尙パイナップルの罐詰の中に在つた。乞食か捕虜が御飯を貰ふ時
の樣に八人は各自の茶碗を分配者の前に並べた。分配者は嚴な手付でその罐詰を切り
開きナイフでまづ大きな片を小さく切りながら少しづゝ茶碗に入れて行く。先には極
めて溫淳重厚であつたわが君士達は今やその野性を現はし、ある者は猛然として起つ
て己れの分前の少なき事を詰つた。分配者は苦心慘憺して衆人環視の中にその至難な
任務を果して行く。汁の分配に至つて混亂は絕頂に達した。

一先づ行き渡ると自分のを多量と喜んだ者は削減されぬ間にと大急ぎで茶碗を引込
める。天幕旅行は誠に贅澤な旅行となつたが、ミルクキャラメルの小さい群が中央に
投げ出されるに及んで益すその幸福なる事を知つた。

「毎日天幕旅行をやらうか」

「さうだ。そして其が嫌になつたら學校へ出る事にしやう」

もう死んでも恨は無い。强いて云はゞ氣にかゝるのは殘つたパイナップルの罐詰二
個である。衣食足つて睡眠を知る。めい〳〵携帶のシャツを着込んで充分防寒の用意
をする。入口を開けて外へ出るとぞつとする程冷たい。先刻の薪にはまだ火がついて
燻つてゐる。天地は眞闇。あちらこちらに山の高き低き、又森の茂み、林の並びが見
えるばかり。怖ろしく寒い。

上天を仰げばやはり眞闇な空に、星々が下界から見た時とかはらず閃めいてゐる。
天の河が非常に長い。これに月があらば。

天幕の中で人が立居振舞してゐる影がうつゝてゐる。

「おい一寸中で廻つて御覽。廻り燈籠を見る樣だから」

この小さな蓄音器のラッパ。この寒い夜に、この淋しい山の一隅にこの中で夜露を避けて安らかに眠る事が出來るかと思ふと、これは今宵吾々に取つて全く神の御懷であつた。

天幕の中に入れば流石に窮屈である。一同外套を身に纏ひ頭をあつめて放射狀に草の上に身を横たへた。

提灯を吹き消す。どうも寢工合が惡い。

「狼が來たらどうしやう」

「村の人がやつて來たらどうするだらう」

色々の事を云ひ出す。村の人が吾々を怪しい者と思つて危害を加へに來たら吾々は如何したら善からうかと心配しはじめる。かうすればさうする。さうすればかうやると考へて行くと、とう〳〵村の人々が吾々の周圍の芒原に火を放つ事になつた。芒は忽ち焰々として炎上する。

「なあに。さうすれば草薙の尊をやるさ」

「何？　草薙の尊？」

草薙の尊と云つたのはかねて鵠の鳴きつる方を眺むればなど〻云ふてゐるのみである。呟いて曰く

「知らないのか。くさなぎ、くさなみの尊と云ふぢや無いか」

やはり此處まで出て來た甲斐がある。時間に制限なく思ふ存分談笑する事が出來た。話が無くなつて眼をつぶる。皆の息の音が微に聞える。川の流れの音も段々高く聞えて來、益々高く近く聞えて來て、遂に今にも吾々の身體を押し流さんとする計りに思はれて來た。

思ふた程寒くはない。しかし思ふたより寢苦しい。背中が痛い。

色々の事が思に浮んで中々眠られぬ。誰か鼾をかき初めた。向ふの方でも一人やり出した。皆眠らんと努めてゐるらしい。夜は全く靜か。あゝ到々生れて二十何年、初めて草の上で寢る身分となつたかと思ふと萬感胸に迫る。

どうしても眠られぬ。

五　眞夜中の焚火

「あゝ寒いなあ」

と云ふ誰かの聲にふとおどろけば僕は今迄眠つてゐたのであつた。生れて二十數年初めて草の上でねた身は背中の當り方が惡くてどうしても寢た氣にならず、眠られぬつもりで居たが矢張り吾知らず眠つてゐたものと見えて、其れ以來何事も知らなかつた。まづ未だ生きて居る自分を發見したのがうれしかつた。

起きたのは自分一人では無い。眠つてゐると思ふ人の聲があちこちから聞えて來る。

「寒いなあ。君はさむくないか」

「寒い」

「何時だらう」

「マッチは？」

「此處にある。ほるよ。好いか」

「よし來た」シュッ。

天幕に光がさして目が眩ゆい。

「えゝと　二時…半だ」

「さうか。うれしいなあ。まだ十二時頃だつたら本當に悲觀するせ」

「大分寢たね。九時からだから五時間か六時間も眠つたわけか」

「火を焚かうか」

「あ。それがよからう」

「提灯を點けやうぢやないか」

家に居れば暖い夜具を被つて日が軒に上る迄何も知らず太平の夢を見得るに、自ら好んで來たとは云へ如何にもお痛ましい次第になつたものである。

三脚からぶら下つた提灯の光で見ると七人の外套の姿が並んで座つてゐるのが朧に見える。ぶくさん一人はまだ平氣で眠つてゐた。

「雨が降つてるぜ」

この言は刃の如く人々の心にひるがへつた。

「雨？」

「川の音だらう」

「いや天幕が濕つてるよ」

「僕もさつきからさう思つて居た」

「こいつは困つたなあ……」

手を天幕の隙間から出して見て

「おゝさむい。……ん。何か降つてゐる」

雨は何より大禁物。然し僅かであるのが有りがたい。暫く坐り込んだまゝ默つたり話したりして居た。昨夜初めて鼾をかき出した人が問題になつたが、おん大はのみだと云ひ、のみはおん大だと云ひ、とう〳〵そのまゝ懸案となつた。

「何だか足が寒いと思つたら夜通し天幕の外へ出てゐたのだつた」と云ふ者もゐる。やがて余りの寒さに堪えかねて表へ出て焚火をする事にした。雨は微少であるから外に居られぬ事も無い。無論星もなく天地は墨の樣に眞闇。木が濕つてゐるから昨夜より益々燃えにくい。山の空氣が實につめたい。

やつとの事で火がついた。廣い天地間に動いてゐる者は唯吾ら許りの、淋しい靜かな空氣の中で小さい焰がゆら〳〵と燃え出した。人の顏が赤く輝く。手近の芒も仄かに見える。火は流石に暖かい。けれども何時迄も外に居るわけに行かぬから火を中へ持ち込まうと云ふ事にした。天幕の眞中に土を堀り下げて、罐詰の空罐で運び込んだ火をその中へ置いて見たけれども何程の効もない。消ゆれば消ゆるにまかせて、皆再び横になつた。眠るつもりでは無かつたけれども一人眠り二人眠りしてとう〳〵皆又むづかしい眠りに落ちてしまふた。

六　山の朝

次に眼をさましたらもう曙であつた。時計も五時頃を示してゐる。臥たまゝ暫くだべつてゐたが、やがて一人二人と皆起き出した。山氣幕の隙より洩れ入つて座ろに足

が寒い。思ひ切つて外へ出て見ると成程朝景色である。草木の姿もあきらかに見える様になつてゐる。

あたりは一面に雲。昨夜は全く雲の中で一夜の眠をとつたのであつた。

その雲ももうだん〳〵地を拂ふて山の上さして逃げて行く。富士の方を望めば青く白く曇つてその姿も見えぬ。外輪諸山が仄かに青く立ち並んでゐる。遙かに下の方には芦の湖の一端がまだ青黒い水をたゝへて冷たい眠の中に横はつてゐる。

朝は東の空からあけかゝつて來た。誠に氣持がよい。早朝から思ひ切り大きな聲を出して歌ふと、聲はかなたへ疾驅して行つて雲の中に消え入る。

芒の中の濕つた天幕。一夜の親であつた。おかげ樣で小雨に濡れる事も無く、山の冷氣に包まれる事も無く、誰一人風邪にもかゝらずに夜を越すことが出來た。誰か一人か二人は、わるくすれば八人が八人迄風邪を引くかも知れぬと心配してゐたが、今八人ながら無事に異狀のない元氣な顏を見合はすことが出來た時、口をそろへて天佑だと喜びあふたのであつた。

蘆の湖迄顏を洗ひに行かうと云ふ事になつた。それでろば一人を留守に殘して他の七人は鍋、米袋、茶碗などを持つて天幕を出た。實はろばはかねてリョウマチで痛い身體に、足の裏に大きなまめを出かして平常でも歩くのが困難であつた所を無理に同行して來たのである。二里餘りの石敷の山道に歩みなやんだ事は一通りの事ではあるまいと察したのであつたが、弱音嫌ひの彼は道中一言痛いとも云はなかつた。かれが無事について來る事が出來たのも皆が天佑とよろこんだ一事であるが、これからの永い道を更に安全に行かん事も一同の心の願であつた。天幕の中には未だバイナップルの鑵詰が二つ殘つてゐる。ろばが留守番では甚心元ないけれども仕方が無い。七人は蘆の湖へさして下つて行つた。朝が大分近く迄やつて來てあたりの雲もよほど退いた。山上の朝は誠に氣持がよい。

小鳥の樣な輕い心を持つて七人は芒を分けて湖へ向つた。昨夜のお馴染の道はつまらぬから一つこの林の間をくゞつて近道を取つてはどうだとぶくさんが云ひ出した。それがよからうと皆林の中を一直線に湖水を目指した。

林の中には高さ二三間の杉が辛うじて人の通れる位の間隔を以て立ち並んでゐる。上から見下した時にはその中を易々と潜つて行けさうに見えたが、中へ入つて見ると中々大變である。杉の大枝が無遠慮にひろがつてゐる中を無理に分けて行けば前の人の爲に曲げられた枝がはね返つてぴし〳〵と顔を毆りつける。衣は引つ懸けられる。帽子は叩き落される。思ひがけぬ所に二三尺の低地がある。前後の連絡も絶えて人は何處へ行つたやらわからぬ。仕方がないから矢張り道へ出やうと思つて行くが、自分達はどこ迄迷ひ込んで來たものか。中々大道迄出られず身體ばかりがさん〴〵杉の枝でいぢめられる。絶體絶命。

外は寒からうと思つて外套をもつて來たが、からだ中汗びつしより。シャツ迄脱いで手に持つて行くと荷物がふえて歩行が更に困難になる。

まあやつとの事で昨夜の道路迄出る事が出來た。出て見れば自分等はまだいくらも下つては居なかつた。所が一人而も米袋を持つてゐる一人がまだ林の中で迷ふてゐる。草薙の尊である。おうい〳〵と頻りに呼んで見るが何處からも應へがない。何處へ行つたのであらう。も一つ聲を張り上げておういと叫んで見ると、おいと云つて直ぐ傍の叢の中からその顔をつき出した。

とにかく人は揃ふたが、朝から而も朝飯前から馬鹿な目にあふたものだ。そこで責任問題である。ぶくさんが發議人であるから何とかしなければならぬと責めてかゝると

「何、僕は行つたらどうかと尋ねた丈の事だ」とうまく逃げた。かわいさうにぶくさんはぶく〳〵した身體を持つて杉林の中で人並以上の苦勞をしながらまだ責めつけられては堪まるまい。

矢張り人並の道は歩くものだと感心しながら昨夜やつて來た森と森との間の道をひた下りに下りて行つた。やがて森の間から下の方に小さな舟着小屋の形が見えた。見えたと思ふ、間もなくそこへ着いた。人々は怪變な顔をして僕らを眺める。

湖の汀に下り立つて顔を洗ふ。冷たくて氣持がよい。朝の湖の眺めも實によい。山は靜かにその黒い影を漾してゐる。水は穏かな浪を打つてひた〳〵と寄せて來る。夏

ならば一浴びあびんものを。

米を洗ふて歸り道についた。又長い阪道を上るのだ。あひるは大事さうに米の入つた鍋を提げて行く。一定の水が入つてゐるからこぼしてはならぬ。他の者は道々薪を拾ひながら登つてゆく。

森を拔ける迄に隨分の時間を要した。森を拔けて芒の野原へ出てからも隨分の時間を要した。かくて峽の中に天幕を發見し、バイナップルを心配しつゝ行つて見たらろばは前後も知らず眠つて居た。

二度目の御飯焚も前回に劣らぬ美事な成績であつた。もし心のある固いのが出來たらどうであらう、折角の苦勞も望もめちや〳〵になつてその上八人が餓えた屍になつてしまはねばならぬ所を、いつも〳〵こんなに立派な上出來の御飯が出來るとは――――これも天祐で無くて何であらう。天幕の中に環座して有りがたい御飯にありつけば、焚火が風にあふられて灰の粉がどん〴〵天幕の中へ散り込んで來るが、御飯に鹽でもかけて食べてゐると見れば何でも無い。

今度は一合許りあまつたが誰も皆滿腹。敢て之をさらへやうとする勇士もない。折角の御飯である、どうにかせねばならぬ。八人で八分の一づゝ引受けやうと云ふても賛成者が無い。バイナップルをみな僕にくれたら食べてやらうと一人が云ふた。そうはならぬ。惜しい飯なれども野狼の餌にやる事にして、バイナップルの鑵を開けた。昨夜の樣に物論囂々たる間に分配が行はれて忽ち皆の口の中へ消失してしまふた。

折角蘆の湖から汲んで來て沸かしたお湯が焚火の上で覆へつて流れてしまつたのは惜しかつた。

食後の運動に表へ出る。ぶくさんが寫眞機を取り出す。富士はもう此の時分には連山の彼方に秀麗な大きな姿をあらはしてゐたが白雲が頻りにその前を通過する。雲が少しかゝつた時は佳い眺になるが、どうかするとかゝり過ぎてその大半が見えなくなつてしまふ。ぶくさんは大雲の通つてしまふのを待つてゐるが、悠悠たる雲は人の心を知らず顔にすましてゐる。

後ろの神山も佳い眺め。嶮しい尖つた山巓にはさつきから白雲が深く引つ懸かつた

まゝ動かうともせぬ。神を見る樣な壯嚴な姿をなしてゐる。それでは此の方を先に撮らうとぶくさんが寫眞をまはす。ねらふて居る間に富士の雲が晴れた。

「富士がよくなつた」と云ふとぶくさん又くるりと半廻りする。ぶくさんが覗いてゐる姿勢が面白い。ぶくぶく肥つた小さい身體がひよこつとかゞんで頭を寫眞器につけてゐる處、ろばは巧に之を評して亥年の新年繪葉書の一等當選だと云つた。

富士と神山との姿が撮られてからわれ〳〵の一生涯忘れがたい天幕の附近の模樣がうつされた。天幕はこれでもう用事が無い。あはれであつたが杭を拔き綱を解いてたふしてしまつた。そして元の通り小さく疊んで袋へ收めたが、此れからは益重たくなる事であらう。天幕を徹したあとを見ると誠に亂暴狼藉。鑵詰の空鑵が五つ六つごろごろと醜體を現はしてゐる。新聞紙が破れてゐる。草が仆されて伏してゐる。よくこんな汚ない所でねて居たものだと思つた。

やがて裝束をととのへて杖で新聞紙や草の間を搔き探して遺留品の有無を檢し、十時數分と云ふ頃愈なつかしい跡にわかれを告げて新らしい旅に發足した。

七　太平臺の小學校

米は $\frac{2}{3}$ の目方を減じ、鑵詰も約 $\frac{2}{3}$ 個を減じて荷物は大分輕くなつた。いやな物は厖大な天幕ばかり。露營地から五六町行けば姥子の溫泉である。何も朝早くから苦勞して蘆の湖迄水を取りに行く必要はなかつたのであつた。

ところが玆で昨日の川の水源地を發見したが、最初の探檢者二人が茶碗に入れて大事に持つて歸つて來て他の六人にも一口づゝ味はせた水が溫泉客の浴した湯の流れである事がわかつた。道理で少しぬるいと思つた。

姥子から大地獄までは十數町の登り道。相かはらずぶくさんの洒落に笑はされながら登つて行く。時々休んで景色を見る。箱根外輪山の向ふ側に白雲かと見えたものは駿河灣であつた。そのわきに愛鷹山が見える。その右に富士の裾野の蜿々とのびてゐるのが見える。壯大な景色に氣持迄壯大になる。

大地獄は全く氣味の惡い所。硫黃のかたまりや、氣持のわるい赤色黃色の岩石が此

所かしこにころがつてゐる。見てもいやらしい所である。

これと對照に上の神山の紅葉が美しい。

大地獄は行けば行く程恐ろしくなつて來る。見渡す限り一面の硫黄の色。至る所噴氣孔から盛に毒氣を吐き出してゐる。無論路傍に青草もなければ、あたりに鳥の聲も聞えぬ。一歩踏み外せば命の無ささうな深い谷の底に一種毒々しい色の水が流れて居る。

數十町の恐ろしい道を越してやつと草地を踏んで行けるやうになつた時は蘇生した樣な心地。

遠く目を放てば相模洋が是も亦雲の樣に見える。そのかなたに三浦半島が絲の如く青く延びてゐる。その先きが一寸切れて海に浮かんだと思はれるものは城ヶ島。三浦半島の頭越しに、も一つ房總半島の青い細長い一筋が見える。ほつと夢心地になつて暫時佇む。

强羅迄道は平凡。强羅から益々平凡。平々坦々たる大通は旅の氣分を丸きり奪つてしまつて自然の妙味は歩一歩減ずる。强羅から雨がふり出したが濡れれば濡れるまゝに任して平氣で行く。時は一時を過ぎ二時を過ぎ三時も過ぎてゐるけれどもまだ中食は認めてゐない。八人聞き合はして見るに誰も空腹を訴へるものは無い。僕らの炊いた御飯は又一種特別の効能があると見える。

道がつまらなくなつたから早く歸り度くなつて來た。宮の下を通り越して太平臺と云ふ小さい村へ入つた時、小學校へ入つて行つて鍋を下した。先生は頗る親切な人で薪を出して來てくれたり、腰掛を借してくれたり、お茶を沸かしたり香物を出して來てくれたりした。

小學校の運動場の片隅に鍋を釣るして最後の食事をするのである。時刻はかれこれ四時。大分文明に近づいて來たから枝の代りに本當の薪で焚く事となつた。草の上に座る代りに腰掛にかける事となつた。芒の穂が見物する代りに小學生が十餘名も集まつて珍らしさうに見てゐた。

雨はもう止んでゐた。水加減も火加減も依然として申分なく前に劣らぬおいしさう

な白い御飯が出來た。三度が三度ながら美事な御飯が炊けると云ふは吾々は皆米炊の天才揃ひであつたのだらう。

校舍の中で最後のバイナツプルを分配する。いつ迄立つてもバイナツプルの分配は一騷ぎを起す。こんな所でそんな不行儀な事をしては兒童教育上よろしくないとおんたいが叱つたので皆が笑ひだした。

焚火の跡をきれいに片附けて灰一つ殘らぬ樣に掃除をし、先生に厚く〳〵お禮を申して出發した。頃は五時。あたりの山々は大分靄々して來た。湯本迄一里半あるさうな。小さい雨がまた降つて來た。道は坦々として丸でつまらぬ。

八　みな無事

日はとつぷりと暮れて伴の人の姿も見えぬ位になつてしまふた。早く湯本へ着きたいが道は中々長い。ろばの足もいよ〳〵痛み出した樣子である。

時々自働車が來てその眩ゆい光の爲にすくみ上らされる。いつ何處で遭ふても癪にさはるのは自働車である。

塔の澤の發電所の山の上の電燈が目當であるが、いくら歩いてもいくら歩いてもこれが後ろになつて呉れぬ。困難な無趣味な夜道。

塔の澤が見えた時は嬉しかつた。いやな溫泉町をあとにして湯本へ出た。電車の光が見えた時はやれ有難やと一安心した。

八人が揃ふた時は電車は既に四五間動き出して居たが、之を呼び止めて乘る。中は滿員。小田原を經て國府津へ着く一時間、疲れた身體を休ますべき席もなく、立ちづめでありながら隨分眠かつた。

國府津へ着いて下車。直に停車場へ入る。車掌が追ひかけて來るので何事かと思へば天幕を電車の中へ忘れて來たのであつた。いくら何でも餘りに現金な。

停車場へ行けば五分で汽車が出る所であつた。これはよかつたと直に飛び乘れば、有り難い事には一室悉くわれ〳〵の獨占。もう是で一安心。最後の元氣を振るつて寮歌を片つぱしから歌ひ初めた。

十一時半新橋歸着の豫定が時間の都合が旨く行つたお蔭で十時半に着いた。都會へ歸つて來た。やれ〳〵今夜は蒲團の上で寢られる。明日から出來上つた御飯を食べる事が出來る。

初めてこんな大膽な旅行をやつて何等の故障を見ず、八人が八人共皆無事に元氣よく、殊に傷足のろばも無事に困難な旅を果たす事が出來たのは何たる幸福であつたらう。御飯を炊けばいつも善く出來る。出まかせに停車場へ行けば恰度汽車が待つてゐる。何處から何處までも天佑であつたと口々に喜んでわかれた。口々に喜び合ふた外に心々に云はず語らず更に深く有難く思つたものゝあつたことは申すまでも無い。

誠に愉快な思出の深い旅であつた。

＊　＊　＊　＊

われ〳〵はしかし是れから又改めて長い旅に旅立たねばならぬ。やはり無宿者の吾々はこれから後も自分で家を作つて自分で御飯を炊いて歩いて行かねばならぬ。どうしてこれが一人々々でやつて行けやう。吾々は何處迄も一所に手を携へて重い荷物を擔ぎあふて進んで行くのである。遠い道に日が暮れて疲れた心細い身體を草の上に横たへねばならぬ事もあらう。その時は無論一所に勵まし合はう。愉快な舟を帆走らせて靜かな海を渡る時もあらう。その時は又一所に聲を合はせて　Der Gute Kamerad でも歌はう。

見知らぬ人々から有難い親切を受ける事もあらう。甘味に舌鼓を打つ事もあらう。神々しい山の高根に紅葉を仰ぐこともあらう。山の曙、ほの〳〵とした山野を見渡して神仙化した心地に入る事もあらう。何時も一所。一所に眺めてこそ紅葉は愈紅であらう。一所に味ふてこそ人の親切は一入身に浸むであらう。

又冷たい風に冷たい雨に身をとぢ込められる事もあらう。荊棘の中に道を失ふて絶體絶命に陷る事もあらう。毒々しい濛氣の中に立たねばならぬ事もあらう。或は又油斷のならぬ世間で四方八方から焰で燒き立てられる事もないとは限るまい。如何なる事に當つても常に吾々は一である。

よし、共に野末に斃れても吾々の白骨は固く握つた手を離たぬであらう。

否。われ〳〵は無慘々々と野の白骨に化する事は恐らくあるまい。天の豊かな佑助は常に吾々が伴なる時その上にあつて、吾々の長い旅路を何處までもどこ迄も護るであらう。

向ケ岡の故郷から出發した吾々の旅路は賑かな樂しい幸福な道を踐んでやがて永遠の美しい生涯に通ふて行くのである。

向陵三年終

大正八年八月　日印刷
大正八年八月　日發行

向陵三年　奥付
正價壹圓四十錢

著者　山岡柏郎

發行者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　株式會社博文館　右代表者取締役社長　大橋進一

印刷者　東京市小石川區久堅町百八番地　高橋季吉

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　株式會社博文館印刷所

發行所　東京市日本橋區本町　株式會社博文館

著作權所有

○○○○○○ 增補縮刷 ○○○○○○

樗牛全集

嘲風・芥舟・臨風・愚佛共編
文學博士 高山林次郎君遺稿

樗牛歿して既に十餘年、世界に於ける帝國の權興も、文明に對する國民の思想も、また一般社會の風潮も殆んど全く一變して隔世の感あるが如くなるにも拘らず、其の論議は救世の光明を以て讃仰され、其の文藻は典雅を以て愛誦され、學に志して文藝に意ある青年の指針として伴侶として同情ある警世の聲として讀まざるを恥づる所以のものは何ぞや。至誠眞摯を以て達觀せる意志感情を天稟の才筆に託し、鬱勃たる英氣を遺憾なく表現したるに依る。玆に增補縮刷全集成りて「吾人は現代を超越せざるべからず」と努力し、「文は人なり」と云ひし樗牛が人格のいよ〳〵焰々として常に日月の如く時世の上に輝くを見る。增補三百五十餘篇一千餘頁。現代批判の標準として敢て江湖の一讀再讀を望む。

三六判洋裝天金緣特製函入
紙數…毎冊八百三十頁乃至九百七十頁
正價各冊 一圓七十錢 郵稅各十錢

◁ 1■美學及美術史…
◁ 2■文藝評論…
全部六冊完成
3■史論及史傳…
4■時論及思索…
5■想華及小品…
▷ 6■日記及消息…

株式會社 博文館
東京本町

汽車の窓から

鐵道院運輸局旅客課
谷口梨花君著

西南部（東海・中央・北陸・關西・山陽・山陰・四國・九州）紙數七百數十頁
東北部（東北・信越・總武・磐城・奥羽・陸羽・北海道各線）紙數六百五十頁

正價各冊 壹圓五拾錢 送料各十錢

新形三六判函入
橋本邦助畫伯裝幀
口繪寫眞版及本版圖版數十個入

案内記は多し旅行記亦少からず、されど車窓よりの案内記は殆ど無し。旅行者は案内記を手にして而も車窓の景觀との連絡なきに失望する者多々なり、「汽車の窓から」は卽ち其旅行者に取つて最必要の案内記にして、地理を說き歷史を語り、交通を說き產業を叙す、名所舊跡名山大河、說いて漏すこと なし。車窓の景觀玆に於て始めて活く而も著者は旅行者の多くが必ず下車せらるべき都市名勝を案内するの注意を怠らず車窓の友たると共に、又遊覽の手引たるを期せり。

株式會社 博文館發行

受驗研學叢書

〔1〕 受驗應用 **英文和譯法** 佐久間農學士著 三六判四百廿餘頁 正價八十五錢 送料六錢

〔2〕 受驗應用 **和文英譯法** 佐久間農學士著 三六判四百廿餘頁 正價八十五錢 送料六錢

〔3〕 受驗應用 **英文法** 佐久間農學士著 三六判四百五十頁 正價八十五錢 送料六錢

〔4〕 受驗應用 **平面幾何學** 松村理學士 武田建清君著 三六判五百八十頁 正價八十五錢 送料八錢

第五編

受驗應用 **三角法**

理學士 松村定次郎君 武田建清君 共著

三六判四百三十頁 正價八拾五錢 送料六錢

本書は主として高等諸學校の受驗準備に必要なる資料の粹を集め、各編毎に教科書上の定理及公式の複習事項を列記して丁寧なる證明を附し、且受驗準備上必須の諸問題を網羅して解法を附せり。其の材料の豐富と撰擇とは此の書の特色にして蓋し受驗者絶好の師友たらむ。

株式會社 博文館發行

283
29

終